

中川市長のドイツ視察報告

総務省の地域力創造アドバイザーで市の特産品開発をご指導いただいている金丸弘美氏（食・環境ジャーナリスト）に同行し、10月3日から6泊8日の日程でドイツ視察をしました。循環型で持続可能な自治体を目指すフライブルク市の取り組みなど、加西市でも取り入れるべき点が多々ありました。

金丸氏を団長とするスタディーツアーに参加したのは、私以外に鹿児島県伊仙町長、佐賀県武雄市議会議員2名、山梨県職員の他、環境・食・農業に強い関心と問題意識をもった方々ばかりでした。「一般人も参加できるツアーだから公務とは言えない」などと市議会で決めつけられ、一方的に予算が否決されたので旅費約50万円は私個人の負担としました。（市長）

■フライブルク市の概要

成田空港からフランクフルトまで約11時間半の飛行。フランクフルト空港から最初の訪問地フライブルクまで車で約3時間。アウトバーン（高速道路）は維持管理面や環境面から有料化が検討されており、日本の政策とは正反対。

フライブルク市の人口は22万人、面積は加西とちょうど同じ150平方km。その半分以上が非開発エリアで、残りの市域でコンパクトシティを形成している。周囲の農村風景はとてとても綺麗。地域の素材・伝統的技術で建てられてきた昔からの建物は、大工さんが違ってもよく調和が取れている。高速道路の路肩や緑地帯は十分に広く確保しており、ガードレールも必要最小限。河川のコンクリート護岸はなく、水辺には草木が生えている。転落しても自己責任という考え方が徹底している。

市長の下に副市長が3人。市役所職員は3,500人。専門職制を採っているため、日本の役所のような異動はなく、原則入庁した部署で最後まで働く仕組み。市長の任期は8年。市議会議員48人中、半数は女性で環境施策の推進に一役買っている。議員は全員ボランティアで、議会に出て各自の仕事が妨げられた分だけ日当が支払われる。

■フライブルク市の環境施策

中心市街地への車の乗り入れを禁止したことで、人通りや商店街の売上が増えた。また、住宅を分散させずに密度を高くすることでコンパクトに土地利用し、まちを活性化させている。

公共交通が、マイカーか、自転車かの選択は市民が自由に決められるが、マイカー保有には高い駐車料金など応分の負担が必要となる。必要な時にレンタカーを借り、カーシェアリングすれば良いというライフスタイルが定着し、トラム（路面電車）の利用は過去15年で3倍に増えている。車を持っていることが恥ずかしい時代になりつつあるとのこと。

2009年2月に加西市で講演してくれた村上敦氏とも現地で再会、フライブルク市の都市計画や環境政策などのレクチャーを受けた。環境教育施設「エコ・ステーション」はNGOが運営している。ドイツでは5分別が基本。生ごみや落ち葉など有機ごみは一般の燃やすゴミとは分離し、55℃で発酵させてバイオガスを取り出し、その後、コンポスト化する。

■フランス駐留軍跡地に開発されたエコ団地「ヴォーバン」

フランス軍跡地38haに小学校や住宅2,000戸などを建設、住民5,500人、600人の雇用を生み出した。パッシブ・ソーラーシステムや高断熱構造など、省エネ性能が素晴らしく、例えば年間暖房費が96ユーロ（約1万円）程で光熱費が画期的に安いこともあって、エコ住宅には子育て世代が多く住んでおり、18歳以下の人口が全体の3分の1を占めている。

トラムの駅間距離を400メートルとしたことで、子供や高齢者が車に依存せずに生活でき、歩いて暮らせるショートウェイのまちを実現、それ



大聖堂前のミュンスター広場は長らく駐車場であったが、車を締め出したことで朝市が復活するなど、街なかに賑わいが戻った。



トラム（路面電車）の軌道には芝生が張られ、防音・景観・環境・ヒートアイランド対策に有効である。



木質チップのバイオマス・コージェネレーションシステムにより、電気と熱が供給されている。うしろはエコハウス。

だけ駐車スペースも減らせた。

道路脇の植栽（市有地）には市が高木を植え、そのスペースを市民に貸し、市民はそれを自宅の庭のように使って低木や草花を育てる。この「緑の里親制度」が町並み景観やコミュニティ形成に役立っている。

ヴォーバン団地の隣り、フランス軍のサッカー場跡地に建設された商業ビル「ソーラーシップ」と、集合住宅「ソーラー・プラスエネルギーハウス」は、冬場20℃、夏場26℃を保てるよう35cmの断熱材や三重ガラス窓、夜間蓄熱など最新鋭の省エネ技術が採用されている。

■ホテル「ヒルシェン」の試み

「エネルギーの地産地消」政策を受けて、ホテル施設でも様々な環境対策がなされている。地下水を汲み上げ、うち3℃の熱量だけをヒートポンプに使用しており、設備は6年で償却見込み。ソーラーパネルのメーカー保証は25年間であり、設備投資は遅くとも15年で回収できる。ホテルのキッチンなどから発生する廃熱の回収効率は35%。

省エネ法により、1984年以降は新しい基準に合致しなければ建設できない。年間の灯油使用量が1㎡当たり5ℓというのが現行基準であるが、2012年には3ℓハウス、2020年からは1.5ℓハウスが義務付けられる。

■ヴァルトキルヒ市長、アイヒシュテッテン村長などと面談

フライブルク近郊のヴァルトキルヒ市庁舎にライビンガー市長を表敬。持続可能なまちづくり「スロー・シティ・プログラム」を推進し、自ら「チッタ・スロウ」ドイツ連盟の会長を務めている。自然の土地を壊して新しく開発するのではなく、既存の敷地を活用することが環境上も景観上も大切。現在の人口は20,700人で、過去25年間で1,600人がゆっくりと増えている。

議員の半数は女性であり、職員300人のうち3分の1が女性である。子供たちと市長が食材を買い出しに行き、一緒にクッキングする「バカンス・プログラム」があり、小さい頃から環境農業や地産地消に対する意識を育てている。ドイツで一番古い音楽学校があり、オルガンによる町興しに成功。

次に、アイヒシュテッテン村のブルーダー村長を表敬。役場の庁舎は450年前の建物。人口3,300人の村がどうやって生き残るかをいつも考えているとのこと。年平均30人の赤ちゃんが生まれており、村の人口は増えている。ワインと有機野菜を生産しつつ、1400年の歴史を生かしてツーリズムに力を入れている。村内に45の専業、115の兼業農家があり、12のワイン農家がある。ぶどう畑だけでも380ha。村内の全農地の20%、131haで有機農法。有機無農薬の野菜や食品を売る生協やエコ・スーパーが大盛況。

■ドイツの有機無農薬栽培とコウノトリ

ドイツでは過去10年以上農業や化学肥料を使っていないことが有機無農薬の必須条件。少品種を大量生産すれば効率的だが、生物多様性を守ることが美味しく栄養豊かな健康野菜を育てることになるとの信念あり。酪農家とコラボレーションして農地と酪農地を定期的に入れ替え、牧草と堆肥（糞尿）の相互融通、天敵による害虫駆除などを実践。

グロッタータール村などでは、古くから環境が守られているために民家の屋根にもコウノトリが営巣している。街灯も殆んど無く、満天の星の美しさに感動した。

大企業が無く豊かな独自財源を持たなかったフライブルク市は、その分、知恵を出して魅力的なまちづくりを進めてきた。第二次世界大戦で市街地の殆んどが破壊され、残った基礎を活かしてその上に新たな建物が建設された。ストックとしての価値があるものを造り、それに多少手を加えながら価値を後世に継承している。都市計画がしっかりできているから、土地建物が世代を超えて継承されていく。有形無形の社会的な富を残していく営みがまちづくりだと思う。

より詳しい内容を市役所ホームページに掲載しますので、どうぞご覧ください。



団地開発の際に樹齢60年以上の大木（菩提樹、プラタナスなど）を残したので、緑豊かで夏は涼しく冬は落葉して日差しが入る。雨水の地下浸透も採用されている。



ヴァルトキルヒ市庁舎にてライビンガー市長（中央）からスローシティ（持続可能なまちづくり）などについて講義を受ける。



観光客の少ない平日の昼間であっても、フライブルクの街なかなは大変な賑わいである。